

大学院留学生の「優秀性」に関する研究

二宮 皓・下村 智子

(平成15年9月30日受理)

The Characteristics of Excellent International Students in Japan

Akira Ninomiya and Tomoko Shimomura

The policy of accepting international students in Japanese universities has been implemented since the 1980's. However, despite this length of time and that the numerical goal to accept 100,000 international students was nearly achieved in 2002, issues related to the quality of students remain largely unexamined. Sound and effective policy would attract higher caliber students, and accepting them would bring benefit to Japanese universities in the forms of higher quality research and enhanced international competitiveness. This paper examines the characteristics of excellent international students studying at Japanese universities. In so doing, the characteristics of excellent students and how such students can be attracted to Japanese universities is considered, an endeavor which may serve to guide the examination and improvement of current policy.

Two different questionnaire surveys, one for university professors experienced in advising international students and another for international students, were conducted by the Task Force on Strategic Policies for International Students to critically examine the suitability of current policies in attracting and accepting excellent scholars from abroad. Based on these surveys, characteristics of excellent international students are examined from three different perspectives: the country where students are from, availability of scholarships, and the character and nature of students.

Survey results led to three main findings. First, students from Germany, the United States, and India are considered to be excellent international students. Second, there are no significant differences on availability of scholarship among nations; in other words, students receiving scholarships from the Ministry of Education, Culture, Science, Sport and Technology are not always considered to be excellent students. Third, characteristics of excellent students include high motivation, strong sense of purpose, strong interest in Japan, and a willingness to accept advice from advisors.

Key words: Policy for accepting international students, excellence

キーワード：留学生政策，優秀性

はじめに

本稿の目的は、わが国における大学院外国人留学生の「優秀性」について、その特徴と具体的な資質・能力について明らかにし、わが国の外国人留学生（以下、留学生とする）受け入れ施策に対する示唆を得ること

にある。

昭和58年8月の「21世紀への留学生政策に関する提言」及び昭和59年6月の「21世紀への留学生政策の展開について」における提言等をふまえた「留学生受け入れ10万人計画」施策以来、わが国における留学生数は上昇の一途をたどり、平成14年には95,550人とその

総数とともに前年に対する増加数も過去最高となった(平成14年5月1日現在)。このように、10万人という受け入れ目標がほぼ達成された現在、より充実した留学生受け入れ政策について検討し、展開することは、優れた人材を世界からひきつけることを可能にすることが考えられる。また、それにより、国際社会に対する知的国際貢献や高等教育機関の高度化、ひいては日本の国際競争力を高めることが可能になると考えられる。

本稿は、平成13～15年度科学研究費補助金(特別研究促進費(1))研究「留学生施策の戦略的方策に関する研究」における調査の一環として大学教員と留学生を対象に行った、二つの調査の結果に基づくものである。これら二つ調査の結果より、留学生の「優秀性」について、出身国、奨学金の有無、留学生の能力・資質、という三つの観点から考察する。なかでも、第三点目の留学生の能力・資質については、第二回目の調査である留学生を対象とした調査において明らかになった留学生自身の自己評価とも合わせて検討することとする。

なお、第一回目の大学教員に対して行った調査は、優秀な留学生を日本へひきつけるための国および大学レベルでの戦略的方策を明らかにするという目的のもと、大学院レベルの留学生を指導した経験を持つ教員の意見を収集したものである。調査期間は平成14年1月10日から同年2月8日であり、これまで大学院レベルの留学生を指導した経験を持つ国内の国・私立12大学¹⁾の教員(教授のみ)5,987名を対象に、優秀な留学生とはどのような学生を意味するのか、優秀な留学生をひきつけるために国の施策や大学の受け入れ体制はどうあるべきか、という二点についてさまざまな角度から質問した。質問紙の最終返却数は1,299であり、回収率は21.7%であった。

また、第二回目の留学生を対象として行った調査は、優秀な留学生を日本へひきつけるための国および大学レベルでの戦略的方策を明らかにするため、外国人留学生の日本留学に対するニーズを明らかにすることを目的として実施したものである。日本の大学院に在籍している留学生7,011人²⁾を対象として、平成14年10月7日から同年12月31日の期間に実施した。最終回収数は、2,199であり、回収率は28.8%であった。

1. 「優秀」な留学生の出身国と奨学金に関する状況

(1) 「優秀」とされる留学生の出身国

第一回調査である教員を対象とした調査において、回答者の31%は、多くの留学生の指導経験を有する教

員であり、積極的に留学生を受け入れてきた教員は、44%であった。他方、22%は「まったく」あるいは「ほとんど」留学生を指導した経験がない、「あまり」あるいは「まったく」積極的には受け入れたことはない教員が14%であった。このような経験を持つ教員が、これまで指導してきた留学生のなかで「最も優秀な留学生」と思われる学生一名について、その学生の出身国について尋ねた。

回答者である1,299名の教員の挙げる国は、およそ76カ国に上っていた。しかし、31%の教員は「中国」を挙げ、次いで14%の教員が「韓国」、「タイ」と「インドネシア」を挙げている。中国や韓国からの留学生が絶対的に多いという事情もあるかもしれないが、多くの教員が中国や韓国の留学生が優秀であると回答していることから、間違いなく、優秀な留学生が来ているといえるだろう。留学生交流の量的拡充が質の高い留学生の招聘を成功させているともいえる。

しかし、日本に留学している学生の多寡が、教員が遭遇する機会に大きく影響し、結果多くの教員が中国など多くの留学生がいる国の留学生を経験から推定する「最も優秀な留学生」として選んでいるともいえる。そこで、各国の優秀率を算出し、高い順に並べた(表1)。優秀率とは、全留学生に占める出身留学生数の比率で優秀な留学生として選んだ回答者数の比率を割ったものである。数値が1以下の場合には優秀であるとされる比率が留学生の実数よりも低く、1以上の場合には優秀であるとされる比率が高いことを示している。

このように、大学院生に関する優秀率については、最も優秀な留学生が多いとされたのはドイツであり、優秀率は4.08と抜きん出ている。第2位はアメリカで2.89、第3位はインド1.98となった。また、大学院生と学部生では、その評価にかなりの違いがあることも注目に値するといえよう。

(2) 「優秀」とされる留学生の奨学金の受給状況

文部科学省奨学金の受給状況は、「優秀性」の判断の材料となりうるものなのであろうか。この点について検討するため、(1)と同様、教員がこれまで指導してきた留学生のなかで「最も優秀な留学生」と思われる学生一名について、その学生が国費留学生か、それとも私費留学生かについて尋ねた。

その結果、回答者1,080名のうち、国費留学生が56.5%(610名)、私費留学生が43.5%(470名)であった。若干国費留学生のほうが多かったものの、それほど大きな差はないものと考えられる。つまり、「国費留学生だから優秀である」という考え方は、通用しないといえる。

表1. 国別にみた全留学生、大学院生、学部生の優秀率と優秀順位

国名	最も優秀な留学生数	大学院生 (n=25,146名)					学部生 (n=34,885名)					全留学生 (n=60,031名)				
		全体での比率	全留学生数	比率	優秀率	優秀順位	全留学生数	比率	優秀率	優秀順位	全留学生数	比率	優秀率	優秀順位		
ドイツ	20	0.02	95	0.00	4.08	1	167	0.00	3.22	7	262	0.00	3.53	1		
アメリカ	33	0.03	221	0.01	2.89	2	923	0.03	0.96	13	1144	0.02	1.33	11		
インド	15	0.01	147	0.01	1.98	3	50	0.00	8.06	1	197	0.00	3.52	2		
ロシア	16	0.01	178	0.01	1.74	4	140	0.00	3.07	8	318	0.01	2.33	4		
フランス	10	0.01	111	0.00	1.74	4	103	0.00	2.61	11	214	0.00	2.16	6		
ブラジル	18	0.01	211	0.01	1.65	5	149	0.00	3.24	6	360	0.01	2.31	5		
イラン	10	0.01	133	0.01	1.46	6	42	0.00	6.39	2	175	0.00	2.64	3		
タイ	61	0.05	826	0.03	1.43	7	394	0.01	4.16	4	1220	0.02	2.31	5		
フィリピン	18	0.01	278	0.01	1.25	8	135	0.00	3.58	5	413	0.01	2.01	7		
スリランカ	12	0.01	197	0.01	1.18	9	122	0.00	2.64	10	319	0.01	1.74	8		
ネパール	10	0.01	167	0.01	1.16	10	108	0.00	2.49	12	275	0.00	1.68	9		
インドネシア	40	0.03	872	0.03	0.94	11	355	0.01	3.03	9	1227	0.02	1.51	10		
マレーシア	15	0.01	320	0.01	0.91	12	1132	0.03	0.36	17	1452	0.02	0.48	14		
韓国	184	0.14	4785	0.19	0.74	13	12773	0.37	0.39	16	17558	0.29	0.48	13		
中国	403	0.31	11692	0.46	0.67	14	20922	0.60	0.52	14	43391	0.72	0.43	15		
台湾	34	0.03	1164	0.05	0.57	15	2227	0.06	0.41	15	4252	0.07	0.37	16		
バングラデシュ	18	0.01	649	0.03	0.54	16	91	0.00	5.31	3	740	0.01	1.12	12		

注1：全回答者は1,299名である。

注2：最も優秀な留学生は質問紙でこれまで指導した中で最も優秀な留学生の出身国を尋ねたものである。

注3：全留学生数、大学院生数、学部生数は、平成13年5月1日の文部科学省集計である。

注4：最も優秀な留学生として挙げられた人数が10名以下の国は除外した。

2. 「優秀」な留学生の能力・資質

(1) 教員が「優秀」と考える留学生の能力・資質の特徴

教員が「最も優秀」と判断した留学生には、どのような能力や資質あるいは態度が多く教員によって優秀なものとして判断されているのだろうか。教員を対象とした質問紙では、20項目³⁾を挙げ、それらについて、選ばれた一名の留学生について回答を求めた。

最も多くの教員が優れていたと回答したものは「高い意欲」(80%)で、次いで「目的意識の強さ」(76%)、「指導教員の助言を素直に受け入れる」という特性であった(68%)。この三つの特性が最も共通してみられるものであり、日本の指導教員が留学生の優秀さをみる視座でもあるといえる。次に、ある程度の割合の教員たちが認めていた特性は、「日本への興味関心」(59%)、「創造力」(53%)、「日本語能力」(50%)、「英語能力」(49%)などであった。また、その他の特徴としては、「海外の優れた大学の卒業生であること」(44%)、「来日前からコンタクトがあったこと」(44%)などがあげられる。

回答から浮き彫りにされる教員が考える「最も優秀な留学生」像はどのようなものだろうか。回答に極端な差がみられたのは、「協定校の推薦か否か」「母国での成績順位」「英語能力」「意欲」「目的意識の有無」「日本への興味関心」「日本以外への留学経験の有無」

「指導教員の助言に対する態度」である。このうち、「協定校の推薦か否か」については、一見すれば「協定校の推薦でない」が62.5%、「協定校の推薦である」が12.3%であり、圧倒的に協定校の推薦によらず留学してきた学生に優秀な者が多かったというようにみえる。しかし、協定校の推薦によってくる学生の絶対数とそれ以外の学生の絶対数を考えれば、この結果が正確なものであるとは言い難いと思われる。よって、これ以外の6項目の結果から類推すれば、次のような留学生像が浮かび上がる。

優秀な留学生の多くは母国でも優秀な成績であり(64.8%)、意欲が高く(80.1%)、目的意識が強いこと(77.5%)、日本への興味関心が強く(58.5%)、そして指導教員の助言を素直に受け入れる姿勢であること(67.7%)が特徴として挙げられる。さらに、英語能力については、「高い」(49.3%)「ふつう」(28.4%)をあわせると77.7%であり、「低い」留学生はわずか7.2%となっている。「日本語能力」では約2倍の15.4%が「低い」留学生であったという結果と比較してみても、優秀な留学生とは英語能力をある程度備えているということが分かる。

このような結果からは、教員の判断する「優秀性」には、能力よりも資質や態度が大きな要素となっていることが明らかである。

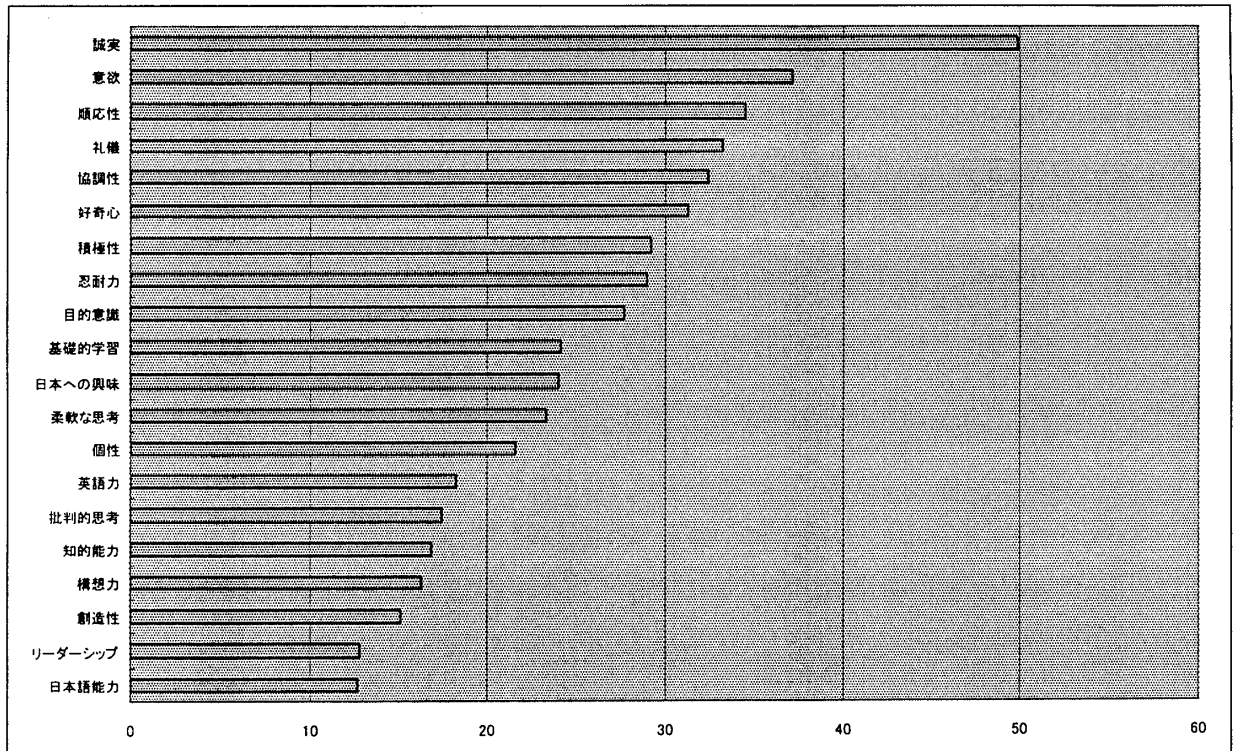


図1. 留学生自身が「高い」または「強い」と判断する能力・資質の割合 (%)

(2) 留学生自身の視点から見た能力・資質の特徴

第二回調査では、留学生を対象とし、21項目⁴⁾について自己評価を求めた。図1は、それぞれについて「高い」または「強い」と回答した留学生の割合である。回答者である留学生が、教員の判断する「優秀」な留学生であるとは言えないものの、現在、日本の大学で受け入れている留学生の能力や資質を判断するためには有用であるとともに、その傾向について検討する材料を提供してくれている。

この質問の結果、誠実で意欲が特に高いと判断した留学生がそれぞれ51%、37%であり、また、順応性、礼儀、協調性、好奇心についてはどれも30%以上を占める高い評価であった。しかし一方で、英語力、批判的思考、知的能力、創造力、創造性、リーダーシップ、日本語能力についての自己評価は低めとなっている。特に、知的能力が特に高いと自己評価できる留学生はわずか17% (国費留学生でも18%)。専門基礎的学習がきちんとできているとする留学生も24%と多くない。創造力や構想力あるいは批判的に考える力が優れているとする留学生もそれぞれ、15%、17%、18%と多くない。英語力あるいは日本語能力の高い留学生もそれぞれ18%、13%と多くない。リーダーシップがあると特に思っている留学生も13%。わが国のリーディング大学大学院の正規課程に在籍する留学生のデータであるとすれば、きわめて優秀な留学生の確保はできてい

ないというべきであろう。

このように、留学生自身の能力・資質に関する判断においても、教員に対する調査の結果と同様、能力よりも資質や態度に対して高い評価がなされている。

(3) 教員の研究を促進すると考えられる留学生の能力・資質

これまで、「優秀」と思われる留学生の能力や資質について、指導経験を有する教官と留学生の自己評価から明らかにしてきたが、では、教員の研究の促進という観点から見た留学生の能力や資質にはどのような特徴がみられるだろうか。教員に対する第一回調査において、「英語ができること」「日本語ができること」等の16項目⁵⁾の能力・資質・態度を挙げ、研究を促進する特質だと思うもの全ての選択を依頼した。表2は、その結果としてそれぞれの項目について選択された比率の一覧である。

選択比率の高かったものを順に挙げると「意欲があること」(87.1%)「知的能力に優れていること」(81.1%)「創造性があること」(73.0%)「真摯に勉強すること」(70.8%)「積極性があること」(69.0%)「誠実であること」(64.5%)「英語ができること」(60.5%)「好奇心に富んでいること」(54.3%)「協調性があること」(50.3%)であり、これらは半数以上の教員に選ばれている。中でも「意欲があること」については、

表2. 研究を促進すると思われる能力・資質・態度の選択比率

能力・資質・態度	選択者数	選択比率 (%)
意欲があること	1103	87.12
知的能力に優れていること	1027	81.12
創造性があること	924	72.99
真摯に勉強すること	896	70.77
積極性があること	874	69.04
誠実であること	817	64.53
英語ができること	766	60.51
好奇心に富んでいること	688	54.34
協調性があること	637	50.32
構想力があること	541	42.73
学部で専門の勉強をきちんとしていること	532	42.02
日本語ができること	503	39.73
批判性があること	317	25.04
日本が好きであること	306	24.17
個性的であること	184	14.53
リーダーシップがあること	171	13.51

注1：灰色は、50パーセント以上の回答者が選択した項目である。

ほとんどの教員によって選択されている。一方、教員にとってあまり研究を促進すると思われる能力・資質・態度（研究とは無関係もしくは研究に悪影響を与える）としては、「批判性があること」（25.0%）「日本が好きであること」（24.2%）「個性的であること」（14.5%）「リーダーシップがあること」（13.5%）が挙げられる。

このような結果から、教官の研究の促進という観点からみた留学生の能力や資質には、「意欲があること」などの「優秀」とされる留学生に共通の資質が見られる。しかし一方では、「知的能力に優れていること」や「英語ができること」など、「優秀性」においてはあまり重要視されなかった能力についても高い比率で選択されていることが特徴的であるといえる。

おわりに

以上のことから、日本の大学に在籍する留学生の「優秀性」として、次の三点が明らかになった。第一に、「優秀」とみなされた留学生の出身国が、ドイツ、アメリカ、インドなどであり、これらの国々からの留学生の受け入れをより促進することにより、優秀とみなされる留学生数の拡大が予想される点である。第二に、国費留学生が必ずしも「優秀」な学生とは限らないという点であり、第三に、「優秀性」を規定する能力・資質については、語学力などの能力的資質よりも、意欲や目的達成に対する意識の高さなど、態度に関する資質が鍵的要素となっている一方で、教員の研究の促進という観点から検討した場合は、能力も同様に重

視されている点である。

これら三点を合わせて検討すると、わが国における留学生施策への示唆として、留学生の選考や推薦において、学力や語学能力に加えて、意欲や態度などをより重点的に判断することが必要であるといえる。意欲や態度などを評価する方法は非常に難しいが、それらをよりの確に判断する方法が開発されて行くべきであろう。

【注】

- 1) 第一回調査の調査対象者となった教員の所属大学は、北海道大学、東京大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学、東京水産大学、京都大学、大阪外国語大学、広島大学、慶應義塾大学、早稲田大学、立命館大学である。
- 2) 第二回調査の調査対象者となった留学生の所属する大学は、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、一橋大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学、東京農工大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、大阪外国語大学、慶應義塾大学、早稲田大学、立命館大学、広島大学、九州大学、政策研究大学院大学である。
- 3) これら20項目とは、母国の大学における成績順位、日本語能力の程度、英語能力の程度、意欲の高さ、目的意識の有無、日本への興味関心の程度、創造力、日本以外への国への留学経験の有無、海外の優れた大学出身者かどうか、来日時の年齢、研究テーマの決定、日本学術振興会特別研究員への採用、指導教員の研究に対する理解の程度、指導教員の指導を素直に受け入れていたかどうか、研究性の経験の有無、博士学位の取得状況、母国への帰国状況、帰国後の成功の程度、日本に残すべきだったかどうかである。
- 4) これら21項目とは、研究に対する意欲、知的能力の程度、創造性の程度、積極的な態度、誠実な態度、英語能力の程度、好奇心の程度、協調性の程度、構想力（企画しデザインする力）の程度、専門に関する基礎的学習の程度、日本語能力の程度、批判的思考性の有無、日本に対する好意、個性の有無、リーダーシップの有無、研究に対する目的意識の程度、日本への興味関心の程度、忍耐力の有無、異なる文化や環境に対する順応性の程度、礼儀正しきの程度、柔軟的思考の程度である。
- 5) これら16項目とは、英語ができること、日本語ができること、知的能力に優れていること、誠実であること、真摯に勉強すること、学部で専門の勉強を

きちんとしていること、意欲があること、日本が好きであること、個性的であること、創造性があること、批判性があること、協調性があること、積極性があること、構想力があること、好奇心に富んでいること、リーダーシップがあることである。

なお、本稿は、平成13～15年度科学研究費補助金（特別研究促進費(1)）研究「留学生施策の戦略的方策に関する研究」による研究成果の一部である。